

令和七年度別府市小・中学生「人権作文」

別府市長賞

「みんな同じ人間」

別府市立中部中学校二年 二宮 晃夢

僕は、父が外国人で、母が日本人だ。自分の見た目が、周りのみんなと少し違うことを、小さい頃からずっとわかっていた。鏡を見ると自分は自分なのに、なんだかみんなと違う。そう感じるたびに、心がだんだん痛んでいくような感じがした。

小学校に入りたての頃、髪や肌の色など、見た目で呼ばれることが多かった。言つている本人達は、悪氣がないのかもしれない。でも、僕にとつては、その言葉の一つ一つが、心に刺さりどんどん心が傷ついた。今思うと「人間」としてではなく、「ハーフ」としてしか見てもうえないような気がして、すぐくつらかった。

一度こんなことがあつた。新しい先生。これから始まる新たな出会いにわくわくしていた時、その先生に、「そこのハーフの子」と言られたのだ。先生としては悪気がなかつたのかもしない。すぐに「足が速いハーフの子」と付け加えてくれた。でも、僕は、その言葉を聞いて胸が苦しくなつた。「自分は、ただの自分なのに。」そう思つて、くやしかつた。

僕は、最近でも、鏡を見るだけで、みんなと違う存在なんだと、はつきり突きつけられたような気がしてしまつ。でも、僕には、友達がいる。見た目などを、気にせずに遊んでくれる友達がいる。嫌なことを言わても、何もなかつたかのように過ごした。でも、心の中では、学校に行きたくないと何度も思つた。それでも僕が学校に行き続けることができたのは友達がいるからだ。

そんな日々を繰り返すなか、自分の中で考え方があつた。きっかけは、陸上部だった。僕は、小学生の頃から陸上クラブチームに入つていたので迷わず入部した。練習は厳しいけれど、一つの目標に向かつて頑張ることが楽しかつた。ある日の練習中、

僕がタイムを大きく縮めたとき、先輩が「お前のその集中力、すばいいな。」と言つてくれた。僕は、今まであまり内面のことを、ほめられたことがなかつた。先輩は、僕の見た目ではなく、僕の「走ることが好きな気持ち」や、「一生懸命などころ」を見ててくれた。先輩の何気ないその一言は、僕にとつて、とても嬉しい言葉だつた。

そのときから、僕は「自分は自分なんだ」と少しずつ思えるようになつた。今では、代表委員もしている。休み時間には友達と他愛のない話で笑い合えるようにもなつた。もちろん、今でもたまに、言われたくもない事を言われることがある。そのたびに、少しだけ心がチクッとする。でも、もう昔みたいに深く傷つくことはない。僕のことを「ぼく」として見てくれる人達がたくさんいるからだ。みんなと違うことは、恥ずかしいことではない。むしろ、僕の個性だ。お父さんの国とお母さんの国の良いところを、僕は両方知つていて、持つている。二つの国の文化や良さを知つていることは、僕の強みなのかもしれない。僕は、この経験を通して、差別というものがいかに人の心を傷つけるかを知つた。そして同時に、差別をなくすためには、過去につらい思いをした僕が自ら何か行動すること、そして特別なことではなく、目の前にいる一人ひとりを、その人自身として見ることの大切さも知つた。

鏡の中の自分は、やっぱり周りのみんなとは少し違う。この見た目は、僕の大切な一部だ。周りのみんなに、僕の心を完全に理解してもらうのは難しいかもしない。それでも、僕は自分の個性を大切にしていきたい。そして、いつか僕のこの見た目が「普通」になるよう、そんな世界になつてほしいと願つている。僕はただの「ハーフ」じゃない。僕は「二宮晃夢」だ。この作文を読んだ人達に、僕の心を少しでも感じてもらえたなら嬉しい。そして誰かを「うだから」と決めつけるのではなく、その人のことをもっと知ろうとする。そんな優しい気持ちが広がつていくことを願つてゐる。